

# 仙台ひまわり訪問看護ステーション

**症 例 概 要** 利用者：要介護3・80代・男性 ひまわりは介護保険にて介入

利用期間：2021年6月上旬～看護師介入、6月下旬言語聴覚士介入、10月中旬～理学療法士介入。現在に至る。

基本情報：妻、長男と二人暮らし

疾患：左心原性脳梗塞

経過：2021年1月に心原性脳塞栓症で入院。5月に自宅退院後、往診・ひまわり開始。翌年8月に症候性てんかんにて再入院。12月に自宅退院し、往診・ひまわり再開となる。以後ベッド上での生活から覚醒不良、経口摂取困難の為、胃瘻による栄養摂取が中心。看護は排便コントロール、吸引、胃瘻ケアにて介入。退院後基本動作に一部介助が必要な為、リハビリでは、ベッド上の動作を自力で行えるよう基本動作訓練、離床訓練等実施。言語聴覚士は奥様に対して口腔ケアなどの家族指導を中心に「安全に楽しみを持って経口摂取が行える」ことを目的に介入する。

## 内 容

元々食えることが好きな利用者さん。奥様の作った牛丼もかきこむほど食えることが大好きでした。1度目の入院の際に胃瘻を増設後、一時的に経口摂取困難となったがひまわり介入したことで、常食摂取レベルまで回復。ベッド端座位でのテレビ鑑賞や奥様の見守りでトイレにも行けるようになりました。翌年8月にてんかんにて救急搬送。4ヶ月の入院を経て自宅退院となりましたが、食事は胃ろう3食、覚醒不良、痰絡みや口腔内汚染が強く、唾液嚥下も十分に出来なく、誤嚥性肺炎のリスクが高い為、以前のように口腔摂取困難、疲労も強く、座位保持も困難な状態でした。

覚醒不良の中でも奥様の食べているお菓子やカニのCMを見て「おー」と一言。利用者さんからも「食べたい」という意思が強く感じられました。奥様からは「少しでも口から食べれるようになってほしい」との声が聞かれていました。

ひまわりチーム、往診チームが協働で「安全に食べたい」を実現するために検討。看護師による吸引や排便管理、理学療法士による覚醒向上や端座位による運動、言語聴覚士による覚醒向上・口腔内清潔の為、口腔ケアや唾液腺マッサージを中心に実施。奥様にも洗浄液を使用した具体的な口腔ケア方法を指導。2週間ほどで口臭や痰量の減少を認め、安全な唾液嚥下を確認。端座位の保持時間も長くなり覚醒も向上。声量や嚥下機能の向上を認め、排便に関しても浣腸後にご本人の腹圧で排出できる状態となり、体調も安定しました。

訪問の度、医療介護情報共有アプリであるメディカルケアステーションを通して、往診チームへ状態報告。往診結果も共有し、ひまわりより嚥下造影検査の実施を提案。検査の結果、お楽しみレベルにてアイスや飲み物等は摂取可能の結果でした。

翌日よりアイスを見て「おー! (食べたい)」と一言。自力摂取にてぺろりと完食。「こんなに食べるようになって、体重増えたらどうすんの」と笑いながら奥様もお話していました。利用者さんからも笑顔が見られ、「口から食べる喜び」を私たちチームで共有できた場面でした。

現在は以前よりも寝返り動作もスムーズであり、端座位でテレビを見ることも増えています。また、1日2回程度、ご本人の好きな物を中心にアイスやせんべい、ヤクルトなどをご自身で食べています。以前よりも笑顔が多く見られ、食欲も増しているようです。

今後は奥様の作った牛丼を食べることが目標です。

ひまわりでは食べるのが困難であってもご本人ご家族のニーズを大切に、「口から食べる喜び・楽しみ」を実現するためにチーム一丸となり支援していきます。